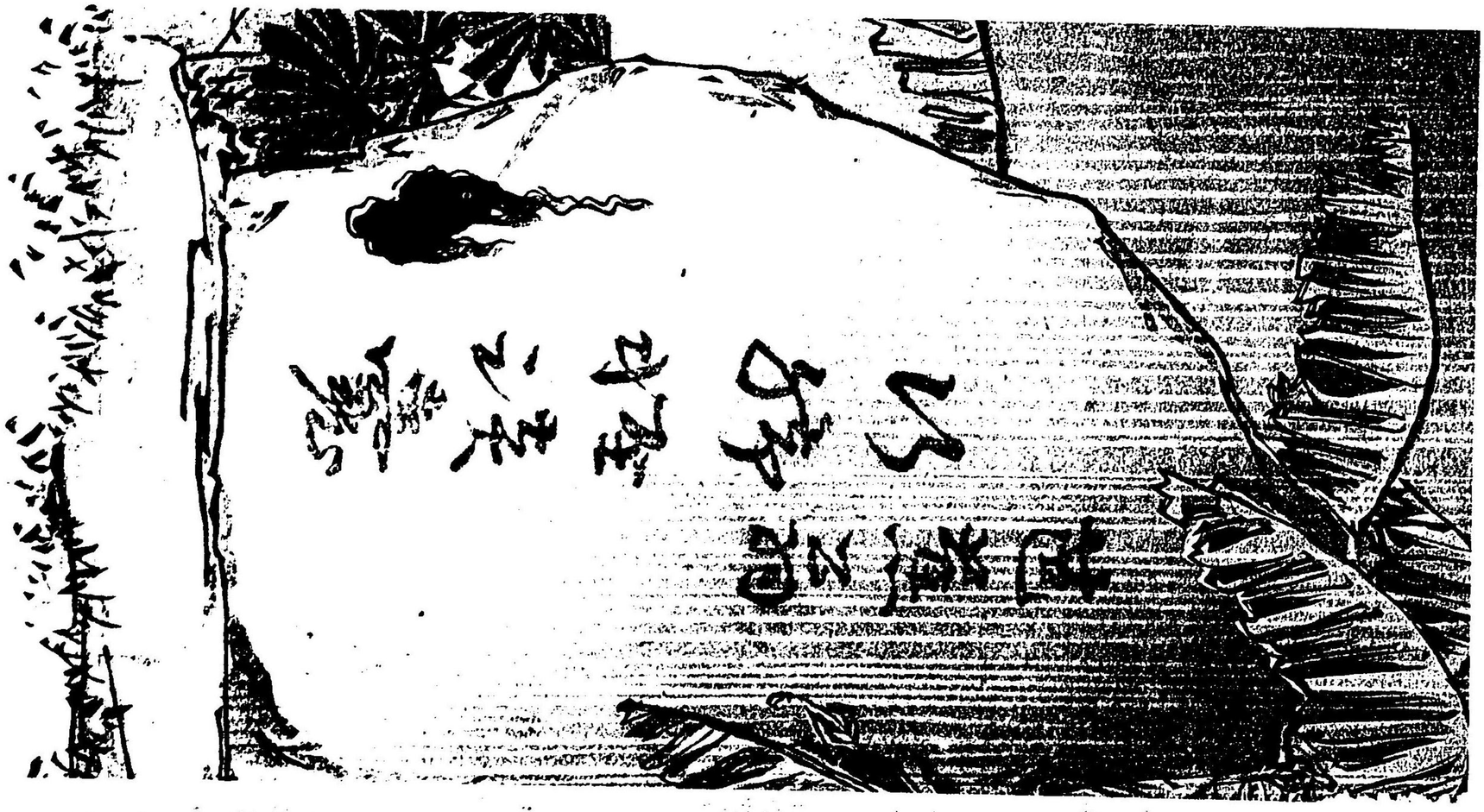


特22
468

明治十九年七月十六日　内務省贈付

芭蕉翁行脚怪談袋

○芭蕉翁美濃路より越前怪敷者に逢ふ事
○去來伊勢參と同道附白蛇龍とある噺の事
○支考四條川原涼附狸人に化る噺の事
○芭蕉大内へ上る事附狂歌を落し噺の事
○置雲上州館林より至る附僧蛙に化さるゝ噺ゝ事
○其角細の悪寒句を吟
附多葉粉屋長兵衛猫の報ひを受し噺乃事
○芭蕉備前國森山を越る事
附獅乃難義より逢ふ咄の事
○芭蕉備前の阿川より難義
附何とあく仇を報ずる事

○許六一句より道を定む附野ヶ原雄の事
○支考門人杜友が方へ至る附怨霊をみる事
○芭蕉筑前小佐川を越る附多吉夫婦霊魂の噂乃事
○芭蕉怪敷者より逢ふ
附古馬ケ原一里塚咄の事
○芭蕉梅盛の塚へ詣
附怪敷童子より逢噺の事
○其角お菊の物語を聞
附杜若の一句の噺の事
○芭蕉翁涙花の旅窓より客死
附門人追善一句の事

目錄終

芭蕉翁行脚怪談袋

芭蕉翁美濃路より赴く　附怪敷者より逢ふ事

芭蕉翁は寛永廿年伊賀の上野藤堂和泉守の藩に生る次男なり寛文六年廿四歳よりして仕粋を辞し京都よいでゝ季吟翁の門に入り書を北向雲竹より學ぶ始め宗房といへり延寶の末始めて江戸に來り小田原町鯉屋藤左衛門誹号杉風と去る此家より尋ね寄る剃髪して素宜といへり挑青と后の名なり芭蕉と草庵より芭蕉を植しゆゑ人よびて芭蕉とよべり此翁の句より主りて自から号まて芭蕉とよべり此翁の句より

ものゝあはれ唇さむし秋の風

是の延寶年中芭蕉翁我誹諧諸國に廣めんが爲一年行脚の如くさつへを替へ日本國中を回國せり此内居所美濃路に

かゝり同國倉元山乃麓を通りける頃は秋の半ゝて山中いと枯〳〵しく木乃葉は黄に染草はおひ繁れども さよふく風も身に染〳〵と杜風に似たり翁はこの淋しき山道をあなたこなたはるかに見やり鹹や春夏は浦の菅屋の氣色迄ものの浮〳〵として人の心の浮〳〵敷あり秋冬に至れば早氣色替りて枯〳〵の有様さればいよゝ定家卿舞建西行れ三夕も各〳〵秋の淋しき躰をよみ侍る又四季を人間に比たとへて見れば一歳廿十五歳迄い春に十有余廿三四十を夏の盛りとする四十有余廿末は秋冬に趣ば血氣衰へ精は疲るれ道理我も四十余ゝて五十に近し是秋の半に退付我も冬とあり風に此世をさそわれ行んはかなき身の上と山乃景色我身にたとへ心細只一人寂莫たる山道をた

とり〳〵行程に日も西山にしづみほのくらく思ひ慮に不思義やはるかに谷底にて汗馬のおとかまびすしく太刀打する体耳元に聞へければ翁思ふやう此所い倉元山の半にて人の住べき所とも覺へず殊更かゝる太平の御代に汗馬の音とそ不思議ゝ若山賊の族か是とても街道にこそ住べきにはるかの谷底にて太刀打する道理あしこれいまさしく狐狸の變化の類ならん何とても怪敷事あし世の人のもの語りにも成らんあれば見屈んと思ひ山傳へに半町斗彼谷底へ下りて見々るに下は松柏しげり底のとまりもしれず其上傳へ下るべき道もあければ芭蕉も跡方あく ある岩角に腰打懸しばし下を見伺居けるに汗馬の音暫まて鎮るとしとまく何方より來りゝん武者一人緋おどし乃鎧を

着し鹿の角よて鍬方打たる甲をかぶり金作りの太刀を帯き手よ一本の矢を携へ忽然と顯れいて芭蕉が二三間向ふよ立て居る芭蕉不思議仕事よ思ひこの武者にとふていはく今世迄豐なり又此所は山中にて人の有るべき所にわらず然るよ其元よい甲冑を帯し此邊よわる事不思議あり抑いかゐる人ぞと尋ければ武者い是を聞ていと真れ成躰よてゐみだをはら〳〵と流しけるは我翁を見るよ歌道よ心を寄せ春花を賞し秋は月に心を寄せ句わいけみよみて怒患邪横を心とせず讃よ佛法法力の手綱へ此ゆえよ我翁のこの所へ來り給を待て顯れ出たり我は何をか包ヤさん其むかし元暦年中よ此山懐の木曾路より朝日將軍義仲よかし付粟津ヶ原よてうち死せ志今井四郎兼平がぼうあん

よてい我忠勤よ命を捨しといへども存生の軍場よて多くの人をあろしたる報ひゆへ修羅乃苦患やる方なし生々世々生を替へる事わたわず何卒翁の敬訓をも得又は佛果の種とも思ひ二つよい此矢の根是い木曾源氏よおゐて澤上の矢の根とて十本の矢の根あり且又澤上といふは人皇三十九代天智天皇未御即位わらざる内木丸殿とヤ所よ御座あり此節諸國乃朝敵退討の爲澤上速といふ者よヤ付られこの矢の根十本打せらる澤上此時ヤ上けるは此矢の根決して敵方へはなち給ふ事なかれ陣中此寶と志給へ必〳〵かたきかろぶべ志といへり天國開け初てかゝるいわれなしといへども天皇是を用ひ陣中の守護神とあし給ふ其後ゆへ有て木曾源氏に傳はれり然るよ木曾沒落の砌此矢

の根を一本失れたり不去の事ありとおもふ所より果して義仲粟津ケ原より討死有り士卒散〳〵となり斯くいふ某も粟津ケ原より主君は粟津の一ケ寺へ葬り義仲寺と号す且又右乃矢の根九本は義仲寺へ納りたれども今一本不足の事我黄泉の深くなげき志が修羅の苦患の内よりもついには此矢の根をたづね求め何卒義仲寺へ納度い間此事願入あり足下四五日の内は義仲寺の邊を通りたまはん願はくは彼寺へ納め玉わるべしと則右の矢の根を芭蕉が前より差置其後芭蕉より問て道一和の歌詠を受く其上又ヤやう足下もし義仲寺へ至り玉はゞ何卒我か佛果をもとひくれいやうよ住職へ傳へ玉ひ是のみ願入いといければ翁も一〳〵承知の旨答へけるゞ其姿は見へざりけり芭蕉

い奇代の事より思ひ武者と見へしは一箇の木草とあり秋風そむる其中より矢の根斗い殘りゝり芭蕉いうつかりと立居志が告志矢の根は殘りある上はうたがふべからず木曾家の武士のあらわれ出て我より此義を願むありと得道志て武士此立居たる方を見やり知り得たるぶつきやうを高聲より讀誦して追善し兼てうかゝ志道なれば一何を吐共聲何より

もれいへい唇寒し秋の風

と讀誦の唇へそよ吹風のあゝしを即座より吟せしとかや扨芭蕉い其後四五日をへて近江へ入り義仲寺に至り住僧へしか〳〵の事を語りて一本乃矢の根を渡志十本より數を揃へける是等の功力よや芭蕉遺言にて義仲寺のうしろわわせよ葬しと世の人の語り傳ふ

去來伊勢參りと同道の事

附白蛇龍と成る斷志の事

此去來も其頃の世に聞へける誹師之生れは京都洛中五條の者之住居は洛外の九條より住けり去來誠時用事より付紀州の和歌山より至り諸用を達し其後歸路より及ひ同國新宮乃野邊を通り志時かたわらの本蔭より年の頃廿余才より して疲たる体の男いろ青さめたるがよろめき出て去來を招きけるゆへより去來と何用成るやと立寄けれは彼乃者ヤけるい私事は當國堺嶋邊の者より て誠や日本より生を神乃御惠を請ながら此儘邊土に一生を送られん事殘念の事かな何卒近國より てもわらハ伊勢太神宮へ參詣してと思ひ志きりなれハ四五日以前古郷を隠れ出けれども遠とても無之い得ハ只一

人此所まで參る所前世の惡行や強かりけん神も參詣を悅ひ玉わぬのか五体甚しびれて一足も歩行ならずせん方なく此木の蔭より打臥罷在何卒旅人を通り玉へかしあの事を告て如何樣にも賴をヤべしときのふ蜜時分ヶ今日迄相待といへども折惡志く一人も通なく此故より食事とてもあさず只今迄苦しみ居る所貴所樣御通り有る事誠より我等が爲より幸ひなり右の次第よいへば近頃乃ゆ願よい得ども何卒馬ありとも駕籠ありとも ゆ雇下され伊勢の津の邊迄ゆ送下さるかたとへ身は叶ハずとも何卒〳〵太神宮へ參詣仕度い人一人ゆすくひ下さると思召ひとへよゆ願み入と願ひける去來は元來慈悲深き事なれハ此事を聞て氣の毒より思ひいか樣人家もなき所にての惡病我等如きの旅人より

ても頼み給はずんばたれか世話をなす者あらんや殊に病氣ながらも是非參詣の心ざし殊勝の事なれば心安くれもいるべき我等駕籠を雇來りて勢州津まで送るべきとてわざ〳〵二三里も戻り元の道へ立戻り駕籠を雇來り彼男よ乘りたまへ送りやべしと云に此者甚だ悦び則駕籠に乘りて紀州へ越へ志摩の二郡を越へて勢州に入程なく津よ至りける此津の岸といへる所は南い廣〳〵たる蒼海北は大山よて大木生茂りがんせきそびへたり東は太神宮へ出る道あり西は只今來りたる海道なり此者駕籠より出て去來に向ひ扨〳〵有難き深志我望みの所よ參りたり旅人よは是か御歸下さるべし此二三日御介抱乃御禮言葉よも盡し難し然共一禮すべき便りなし此御禮は末〳〵永々謝まヤ

べしといゝけれい去來は心得ぬ事と思ひ彼者よ問ひけるい此所は海山の間よて人家とてもなく殊更ものそおき所ゑ然るよ貴殿何れを便りよ落着し給ふとヤタれば彼男答へけるは御不審は御尤あり今は何をか包まヤさん我は誠の人間よあらず實い山野にやどる蛇あり我かり染よとの世よ生れ今年今月今日迄にすでよ千年をふる是がゆへよ天帝か命を請此度天上へ至り變じて天龍と成りい扨又貴公を頼し事は惣体ケ樣に出現をとぐるよ山に百年海に百年其後人道よ交らずんば出化はとげ難き我二百年が間山海よ住たれども未人道よ交らず此故に伊勢參りと變じかりよ其元にたより同道よまじわる所なり今人道山海三ッの修行を遂たれば出化致すなり時至れば片時を相待事

なり鄰者貴所聞き給ふ事なかれ某今あそ雲井へ登りしと
いふ言葉の終らぬ内に彼者の姿はきへて一ッの白蛇と變
ぜるが其蛇南の海岸に至りうねりを返し頭を上ケては
るかよ空をながむるとひとしくこはいかよ快晴たる天氣
暫時の間よ黒雲おゝひて四方まつくらに成て震動はげし
く風雨かとり其すさまじき事云斗あ志一村乃黒雲白蛇の
上へおゝひかゝると見へしが忽にぞれ如くある姿とあり
海底のなみをうへし雲井はるかよたち登る黒雲引行よ隨
ひ跡だん〳〵と晴渡り南の空のみ稻妻こんとんとしてそ
さましき氣色あり駕籠の者ども大きよ驚かたわらよ倒れ
臥けり去來も目をぬひり居たりしがやゝ有て目をひらき
扨は白蛇只今こそ通力を得て天上なしたるかとはるかよ

あなたへ引行雲稻妻のひらめく有樣を見て

稻妻や雲よへりとる海の上

と口そさみて奇異の思ひをあして其所を立去りしが實此
龍の雲井よて守りけん去來次第〳〵よ幸ひを得て有德よ
暮けると語り傳へり

支考京都四條川原涼

附狸人に化る噺しの事

生酔をぬぢすくめたる涼かあ是世乃人の知る所なり生國
は近江の者よて京都に住けりある時支考同所三條町の笠
屋といふ町人の方へ來り右の者共同道して頃は夏の暑さ
をおもれんと四條川原へ行茶見世にて涼み居たり酒肴を
好み出させ河原より吹上る風よ身をひたして四方山の物

語よ勢盃をかたむけ樂しをける此茶屋の給仕の女年の頃十六七と見へ玄が其粧ひ柳の枝よ花咲たるよひとしく美しき事云ふ斗なし支考を初座中の者とも其美麗成よ依て汝は此茶屋の親類が又い抱の女あるかと尋ねれば此女いと恥かしき体にて只打笑ふのみ一言の答へなし連の中よ一人此女の身乃上を茶屋乃亭主よ問ひける時ある玄ナけるはされバ其事にてハ此女十日程以前より夜中客人れ出の度〳〵座敷へ出て酒飯あどの給仕をのぞむ私も存ぜぬ女あれバ隠しんよ思ひ何方の者なるやと住居をとへども答へずすへ〳〵あやしみ捕へんとするよ稲妻の如くよてさら〳〵手に取られず打捨置いへバ又あらわれて客の座敷に出て給仕致事なり何の變化とも知れず然ども返て調

法成ゆへに打捨置ヲあんりと語りけれバ何様よも狸狐の類あるべし何卒正体を顕し見たき物成と亭主もいふあまかせ彼男是を聞ていか様夫はあやしき者なりとて座敷へ帰り見るよ彼女又出たり右の男支考を初一座の者共にも此事を物語りしゆへに酒を半よ及しよたがいに差引盃のめる時よ及んで彼女よあひを願む女辞する事あ々一盃受れバ其時座中しめし合せ渠に酒を志いて酔潰志正体を見届んとはかりける怪女い此工みをさいしらざりけん猶もあひをしてもらいたし爰よりもつけざしと願むと盃の數重あるよもかつくめいわくの様子をあく引請〳〵飲はどよすてよ一升も飲終るされども少志も酔し体もなし平生の顔色にて有けれバ諸人けしからぬ事ありと思ふ所其

内一人ヤタるい女の身として斯大酒をし顔色平生の如なるは彌もつて怪敷者あり誠よ變化なるべし然は此上いか程飲せたりとも役よたゝずと側よ有ける吸もの桶のふたを出し彼女につがせて一盃飲其盃を直に彼女よさしたれバ此盃を引受て呑事十余盃よ及びけれバ一座の面々大きよ驚きける所あさすが大酒成りしかば彼女首をたれて居たりしが其儘横よあり前後もしらず寢入たり其いびき大雷の如く亭主も來りて此体を見能時節成りしバるべしとて縄を持來り後手よからめ柱よつなぎ置是を見て又々大勢い酒盛を始めけるに支考盃を受て

生酔をねしすくめたる涼かな

と吟しける彼女はしバらく酔て生を失ひ一そいの内よお

もいず姿を顧はしけるを見るよ其樣犬の如くなる狸にてそ有ける一座是を見て扨ゝそ斯有べしと手を打しが其後亭主よ告て彼者化たるといへどもさして害なけれバ目を覺しなバ放し遣し然るべしと予置て予皆々歸りける亭主も其言葉乃如く翌日よ至り放遣去けるとなり

芭蕉大内へ上る事

附狂歌を得手者嘲の事

春もやゝけしき支とゝけふ月と梅

芭蕉廻國の砌美濃路を經て近江へ入り義仲寺へ詣て夫ゝ草津大津を越へ京都へ至り路中四條中屋何某といへる當所に隱れなき有德人殊更俳道の事ようみ支考の門人なれバ衆て芭蕉をも隱ひけるあのゆへよ芭蕉彼者れ方へ尋至り案内を乞ふ亭主折ふ志在宿にて芭蕉の來りし由を聞て大きに悅ひ急き立出て上座へさそひ初對面の談義をのべ其後仲屋予けるハ私儀當所へ住居いたし世を幸よくらし何不足無し得バ万事は家人よ任せ私はつれ〳〵をなぐさまんと又好の道なれバ支考よ便り俳道を少志學べり右支考の浦嘶しよて翁の事も聞待る誠よたぐひなき浦方と承りし得バ希ハしバらくの間浦逗留有俳道をも明らかよ浦敬へを受予度と割なくも願ひけるに芭蕉も此由を聞て世事の義にかゝわりなく俳道に心を寄せらるゝ事殊勝の事なれば我も諸國を廻りし草臥もいへバ此所よ休足致べし浦世話頼み有ると是ハ仲屋が方よて數日逗留ある仲屋は好の道なれバ俳諧發句の秘傳を聞よ芭蕉をつれ〳〵れ余

り發句の切字十七字のつゞり其外誹諧の道具傳を一〳〵譚り聞せるゑ其教へ誠ゑ顯然たり仲屋い芭蕉をしたい數日その譚りゑ及び居ける内ゑ禁裏にても東の芭蕉當所四條の仲屋方ゑ逗留のよし聞し召れければ其かみ其角以來の誹人の由聞及び志事あれば招其たん練の程とも御聽聞あらんよし院より仰出さるゝゑ付勅の趣き内裏か仲屋へ仰付られける仲屋是を聞て芭蕉ゑ斯と告しかば芭蕉御掟あれば早速内裏へ至りける程なく芭蕉殿下へ御招き有ゑ謹てきざはしのもとへ平伏す殿の脇ゑ伺公の殿上人芭蕉ゑ宣ひけるは誠や東の方は荒うみすど号して哥道誹道の類に達したる者曾てあらずとをもひしゑ今其方は生國東ゑて其道ゑ賢き事おそらく世の人の及ぶ所ゑあらずと傳へ

聞たり今幸ひ洛中にある事を院ゑも聞し召れし依て召呼る〳〵所ゑ慰ゑもあれば此方より題を出すべし是ゑ依て汝が胸に得て志發句をつらねて差上べしと院か春の月梅といふ三ッの題を下されしかば發句十七字の内ゑ三ッを顯わ志ヤべしとの掟あり其時少しも案する躰ゑもあらず

春もやゝ氣色とゝのふ月と梅

右の通り一句の内ゑ春月梅三ッの題を顯わし吟志て差上れば院を初御側の殿上人誠に即席の發句驚入志と感ぜられ此時翁と云官を給わるかゆへゑ世の人芭蕉翁といひ侍るとかやげにや其道ゑ至てかゝはきは右の藝ゑて世を渡る習ひ此節い古人となりゝか共其角法印も内裏へ

召れて其方誹道發句よ達しける由何卒定家れ綴り去百ケ
吟の内後徳大寺左大臣の歌に
本とゝぎすそ鳴つる方をながむれば
たゞ有明の月ぞのこるゝ
此歌を發句十七字よ直さるべきやとの御掟の節其角去バ
し思案の体よて其後右の歌を發句よとりて
さては安の月が鳴たる本とゝぎす
と吟して奉りけれバ各々御感浅からず御賞美のあまり法
印の官を給ハりしとかや此事あまねく世の人の知る所な
り扨芭蕉は浮暇を給ハり内裏を出て仲屋方へ立歸り其後
仲屋方よても芭蕉を會主と去て百韻れ誹諧を初めけり此
時翁はいとかも去ろき付合なと有中よも僕が狂哥を手傳
てやるといふ付合よし
徳利乃酢をついて半分呑よけう
とおとけ去ぎりよて前句乃心へひたつけ句躰ハ放れて付
けれバ諸人皆笑ふて興よ乗じ其後皆〳〵芭蕉へ望みタる
ハ下より上へつるし下けたりといふ題を出去先生此道に
あまねく賢くしへども何をよもこの題へ一句を付て見給
へかしとヤけれバ芭蕉是ハ難題かあとしバらく思案せ去
がかたわらの筆を取題の次へ書付し
風鈴の思ハずに見手氷鉢
と吟去けれバ仲屋を初一座の面々かんじ入しとかや其後
數日逗留の内百韻數度興行す芭蕉もわらゆる發句をつゝ
ね早一ケ月を越しかバケ様よいたづらよ日をれくるも如

何まづ是より江州へ至らんと仲屋よも立出ん事を望む亭主も其止まるまじきを知り廻國終りあば又〳〵ほ出を待いといへば芭蕉い族の粧ひをなし仲屋方を立出る此時仲屋芭蕉を見送りける時い冬のい装めなれば

あの頃の氷ふみわる名殘かな

と一句を吟ず芭蕉甚是を譽る是も仲屋其道を深志なれば

なり此仲屋何某といふ名い知られ共評徳い杜國といへり

嵐雪上州館林よ至る

附僧狐よ化さるゝ咄し乃事

此嵐雪ど天和年中の誹人なり生國は上州山田郡依田村乃生れにて雅名ば喜太郎といひしが幼少より才智人よ勝れ衆人の譽物なり十四歳の時江戸へ出來りて鎌倉河岸よ綵

者ありしよ便りてよき家業をも仕覺へて江戸よて一身を取立させんとの父が了簡あんり綵者も是よよつて喜太郎を近所の紺屋へ奉公よ遣ー十四歳より十七歳迄彼の方よて其職を學ばせけるよ元來ようなる者あればとく〳〵其職を仕覺へ今は家業の片腕よもあるべき所よ右紺屋の隣家よ嵐丁といへる誹人ありよく誹道に達して門人もあまた有りける彼喜太郎隣家の事故ひまの時には嵐丁が方へ來りしが後〳〵い誹道の付合なども覺へ甚だ面白き事に思ひ其後はれい〳〵と嵐丁が方へ來り家職乃事よい心を奇せざりしが終よいつとあく紺屋の職をやめて嵐丁が門弟とありぬ父母も傳へ聞て心ならず思ひしがとも一筋の藝成るべしと其儘よして差置けるが果して喜太郎四五年

の中よおつばれの誹人と成評徳を嵐雪と号き師の嵐丁い
く程あくして身まかりしが闌雪此跡をついで宗匠たりき
が又も自分は及ばざるを思ひ芭蕉翁の門人と成是よりは
よく其道よかしこく誹力は嵐丁にいやまして世よ北を顕
はしなる嵐雪或時故郷をしたい今は父母も古人と成りき
といへども なを親族の者あれば上州へ至りて彼方へ便り
父母の石牌をも拜せんと江戸下町を立て板橋通り上州へ
越る同國衣卷の里館橋よ至りける此館橋といふい古へ北
條氏政關東を領し玉ふ時初て此橋をかけられしより今に
破損などあれば館林の領主より修復有なり橋の長さ一町
斗よ志てらんかんぎぼしありいとはなゝ敷橋なり然る
所よ此橋詰よ旅僧と見へて高らかに經を續んでいたり嵐

雪が此所よ至る頃は未早朝よして日もやうゝ東山よあ
がる頃朝霧頻りよして通る人もあらずされども僧い一心
よ經をよみてゐるを闌雪見て此僧も定て大願の事よて有
べしと思ひ世捨人の身と志て殊勝よと即時よ嵐雪
ぎばうしゆの側に經よむ威徳哉
と吟志程あく僧のかたはらよ至て見るにあいかに彼僧
頭より五体を草のつるよてくるゝとまかれ手も後ろ手
よあしとくならばほどけゝれどもとかんとせず只目を
ねむり一心よ彌陀經をとくじゆしてゐたり闌雪其体を見
て心得ぬ事に思ひ即とひけるは貴僧は見れば旅人の体な
るが未人通りさへあき早朝に蔦かずらに縛る身をからめ
られ一心に經をよみ居らゝ体心得ぬ事かなと高らかに

問ひければ僧は猶一言の答へもなく居たりけるゆへ嵐雪いよ〳〵不審れれず手をとらへて僧をゆそぶる僧れ是よつて目をひらき嵐雪をまじ〳〵と見て其後自分身よ為かずらを卷たるを見て大よ驚きたる体なり嵐雪さらよ心得す僧よ其故を問ふよ僧は閑雪よ尋ねけるとは其元は何れの人ぞといへければ旅人なりと答ふ僧又夜明夕よやと問ふ然りといふ其時僧れ不思議の思ひをなし譚けるれ某れ諸國を修行の六部よてしが是よ下野の方へ至らんが爲よきのふ此の先の野邊を此方へいそぎし處日も夕陽よかたむき其上空腹に成りしゆへ袋よ團子を取出したべんと存る所よかたはらよ大成る狐出て右の袋をくれへ逃んとしげるを我追かけて木の枝をもつて彼の狐をしたゝか打のめし

袋を取かへ一其後團子を食ふ終り道程二町も行所よ既よ日くれし故里へ出たくもはるゝなれば野宿いたさんと腕を枕とあるかげよ休ミ居たりしよ先の方よ大勢の供廻にていかよも大名の御入都の如く行列正しくふり來りけるが御供の面々我〳〵が休みをみけるを見てあの坊主は贈ふとさやつなり起あをりもせず寐てゐる事の無禮さよいはゝ慮外者なりと大勢の面々我を取まきしよ我れ道乃片はらなれば邪广よもあるまじとふせり居し由ヲといへども曾て聞入れずして大勢折重り某を高手小手よいましめ殿の御前へ引出たり殿は乘物の戸をひらき甚いかり玉ふ顔色よて諸國修行の身として恐るべきを恐れず禮義をもわきまらざるれ大膽至極なり此者其分にすべからず我

前にて首を刎べしとのをぶせなりしかば片わらの面々驚革を持來り其上へ某を乘せ渺茫の腦の人氷のやうなる刀を拔て我後へ立廻りける故我はかあしくなげきてひたすらよびをなすといへども誰有て聞入るものもなければ今い某も思ひきり迚も叶はぬ所と兩手を合せ目をふさぎ一心に彌陀經をくりかへしどく宏ゆあしいひしに殿は右の太刀どりを呼はれ何やらん告給ふやうにて手間取しが其後彼の太刀取立歸り我をゆすり動かそ故無據目をひらき見しに太刀取はあらずして其元あり野邊わらて此橋の上なり殿を初大勢の供廻りと見へたい消うせたばられしいケ樣の蔦かつらの類なり是を思ひ見るに昨夕打たゝきし狐の其たゝかれと腹をいんが爲に大家の供廻りの

駄よあゝ我を化しいならんとれぞげをふるひ扨〳〵ひやいある目をいたたりと語りけるに嵐雪も太に感をて全く狐乃所爲あらんと語り合てぞ行過る

其角猫の懸額句吟

附多葉粉屋長兵衛猫乃報ひを受し咄の事

此其角も其頃名高き誹人なり生國は武州江戸下町にて生れ父は神部宗庵とて名を得たるいしやなり一人の男子を持幼少より無類乃才智備り父母の寵愛斜ならずされども成長するに隨ひ父の職を好まず其好む道なりとて廿一才の時其櫻といへる誹人の門弟となり其道に出精するに隨ひ誹道の諸人扱て子世上に名を顯としたる此其角が隣家に長兵衛といふ多葉粉屋有り此長兵衛が母至つて猫を愛

し猫四五疋の内一疋よりても見へざれば下女と下男とヲ付あなたこなたと尋ねさせける長兵衛うるさき事ヨ思ひけれども母のいたわり好む事なれば其儘ヨあたて差置ける然るに此母風のこゝちヨ有りまが次第ヨ病さま重り醫療の甲斐もあらずして終ヨ病死せり長兵衛は母の死後早速四五疋の猫を他人へ遣し只一疋年經し猫を手前に差置けるが彼猫或時長兵衛か大切ヨかけたまなみ置き鰹乃盗からを夜中ヨ殘らず喰ひ終り壺をあめて居たり長兵衛此も乃れとヨ目をさまして彼所ヨ至りて見るヨ右の猫盗からを喰ひ終り壺をなわへてゐたるを見て大ヨいかり我さへも大切ヨ置たまなみ置ける品を盗み喰ふ事畜生ありとも あまりヨくきやつと飼置て何の益もなき物ありと即坐ヨ

彼猫を縄にて表ばりいとふとき棒をもつて打殺しける其角は翌日に至り長兵衛方へ行飼猫の盗喰なまたる故ヨくみ打殺しヤされまた事猫の身と思ふべからず人間とても左乃如く今日逆實正のものよろしき人品とあがめらるゝといへども明日ヨも盗悪徒なす所を見付られなば其罪をいん事疑ひなしと此心を思ひつくりて

うき憂とたへてや猫の盗喰ひ

と口すさみけり句体と違へど是は此節よみも發句あり其後長兵衛右乃腕首を頻りヨ痛み出しけるうみもやらず只腫出て外科いろ〳〵其外の良藥を用ゆるといへども其甲斐さらヨあらず後ヨい其腕首ヨ猫の毛の如く成る毛はへて痛み時どりしてたへがたきかば長兵衛今と起居る事も叶

はず病ひの床に打臥けるがげにも不愚義なり其翌年故猫を殺せし月日に終に長兵衛病死しけるとかやげゝ〳〵是も先達て殺せし猫の報ひならんといゝあへりされども猫一疋よりてか程れ事は有るまじけれども此長兵衛殺生好にて餘多の鳥獸を殺せし因果斯くの如くならん事なり

芭蕉備前の森山を越る事

附非々の難義より逢一軒の事

斷まさへ調子合けり春の雨

右れ發句は芭蕉備前の岡山より城下より具田玄蕃といへる詳人のもとよりて讀り其故は芭蕉京都を立て播磨へ越へ一國を修行し備中を過夫より備前へかゝり同國岡山より知人の詳師有ければ此庵へ立もなかん爲其道すがら同所森山のふ

もとを通りけるより此所は東とはるかの谷西へ何丈とも知れず高山あり日もいまだ高ければ芭蕉は何のわやしみもなく此所を越る時より芭蕉がかふり居たるもゝ乃頭巾風も吹かぬよ水上の谷へ落て三丈手も下乃木の枝よかゝりたり是を視て常〳〵かふり付たる頭巾此まゝよて失はん事本意なき事とおもひいづれよも谷へ下りて取來らんと山かつの踏わけし道よりや少し平か成るを傳ひ〳〵漸〳〵と彼木の下へ至りて頭巾を取らんとすれども高き木の枝なれば下より取る事あたわず登り取らんい谷きわなればぶなからん事をあやぶみ詮かたなきまゝ片原ある枯木を手折て我が杖よ羽織の紐よてくゝりつけさはとおして件の枝へかゝりし頭巾を取らんとすれども如何枝にかゝり

けんどけやうよしても取さりしかバ芭蕉はさをゝ取直し彼枝にかゝりし頭巾を打落さんとまたゝか枝を打けれバ其ひゝきかしあへ聞へけれバいるかよああたの木のしげみよりあたまよひゝくくうんといふ聲聞へしが芭蕉も心得ぬ事かあと思ひしかすでよ頭巾も取得たれい暫く休みて彼森をあかめ居たりけるよさ老も生ひ茂りし木は梢迄ゆるゝと見へしがしげみの間より其さま三尺斗の首を出す其面あかき事朱の如く眼い血よひとしく眞丸よして血をそゝぎ大成る目の玉をいからし芭蕉をとつたとよらむ口とおぼしきい耳迄さけ眞黑ある姿にてまバしたゆらい居たりしが面とからだを出すを見れば惣身はまかふ方あき猿あれども其丈七尺よ余る毛色黑く又白き所も有ぶち成

しが末足をば出さずあを〳〵芭蕉が方を見居たり爾ハ今さら大きゑ驚是かあらず惡獸の類あらんうか〳〵と居るあらば決して渠が爲ゑ害をや得んと頭巾を片手よもちながら身をかいして上の方へ一さんゑよ玄登る彼變化は是を見て森を飛出追かけ去ゑ芭蕉ハ運や強うりけん彼獸のいある木乃根ゑつまづきてあろび遙の谷へ落入し事諸天善神の我をすくひ給ふ所なり獸の今谷へ落ずんバ我渠か爲ゑ害せられ此所の土となるべきにあやうき事ありと猶もいそぎ上のふもとへ上り何時ゑやと日もとを見るゑ未八ッ時分の樣子なれバ是より岡山迄は六里ヲと聞へり日の有る内ゑ急がんとあをも獸の追ひ來たらんかと跡を見かへり〳〵急ぎけるゑ其後は變化も來らず漸々六里の道を經て

人里へ出けり是岡山名取の里へ出けり此所ゑて日をやう〳〵西山にかたむきぬ芭蕉ハ大ゑ慌び急ぎ岡山の城下ゑ至りける此所にて眞田玄蕃を尋て彼所ゑ樂内を乞ふ荆中と此玄蕃評德をいへり玄蕃は芭蕉が來ると聞朋友の好身を思ひ出し急ぎ向ひ入て對面し足下ゑは竹馬同樣の友東ゑて別れ去か再び逢見る事も有ま玄と思ひ去に能もはる〳〵お尋下され去事よとヤ〻れバ芭蕉は是を聞て諸國詩道を修行の爲に回國ゑ出し由を語る荆中も頃日の旅の勞れも御座有るべし先つ我方ゑ落付草臥を遽のけ給へとわりあくヤゑ付翁も此所ゑ數日逗留す頃は春の半ゑて殊ゑ霖雨ふり續き庭前の青柳ゑ雨たゝまる風情いと興有るふか芭蕉はあるじの荆中と諸共ゑ樣側ゑ出て酒盛りして四

方山の物語をなす此時芭蕉同國森山より異形の物より逢ひあやうきめを咄る語りければ荊中是を聞て其異形の者いかならず世に云所の猴々成るべし其ゆへハ猿の如きのも乃あり我等も先年京都より此所へ來るとて彼森山へ通りかゝる日あるも未白晝あれい心をゆるしてある岩角より腰打懸て腰より切火打取出る多葉粉すいつけ居たる所には るかの跡の方か其丈壹丈もわらん人の如きの者白ききぬの樣なる物を着し近づき來る我等は人かと思ひしが其丈はすさまじきよ忍付かたわらある木陰よかくれ右れ者をよく〳〵伺ひ見れハ白衣と見へるは衣類よハわらず彼變化乃毛色ハ夫のそあらず面れ赤き事紅の如く我大より驚き

ヲ変を見せあハ必集よ害せられんと必付かしこの蔦りー大木乃上よりあがり枝葉の籠りたる所へ隱れて身をちゞめ息を詰く隱れ居たり程あり彼變化我かくれしわたりへ近付來り大の眼に血をそゝきたるを見ひらき我かくれまかたわらをあたとなたと伺ひ若見付なハ一かみよあさんけまき其あやうき事云斗なかりしがされども我運の强き所にやよりけん彼變化終より我を見付得ず又向の方を伺ひたりしかとあ跡して先へ行過しを我見付らん事を思ひ猶々深く隱れてやゝしハらく其所よありしがいつまて隱れあるべきよをあらずと思ひしがされどもそときみるるき乍も早と彼木より下り立てかたとらを伺ひ見るに變化は何れへか行まと見へて其所よも居らされば扨はゝのが住所へ歸りしものと悦び彼れもれゝ先へ行たれハ我も又

先へ行事い然るべからずと夫より又元來りし道へ引返し前夜に宿せし嘉由といへる里へ至り則其宿屋へ至る宿の亭主不審顔よて問ひけるい旅人よは今朝岡山へ至らんと いふて爰元を立給ひしが彼所へ行給はずして又々立歸り給ふ事不審なりと尋ければ我も答へて不審甚尤ありわらは今朝此所を立出て今日中よ岡山の城下へ至らんと思ひ森山の山道をいそぎし所よか様〳〵れ者よ逢まづかふ〳〵の次第にてあやうき場所をのがれたり彼者は先の方へ行過しゆへかれよ又あわん事を思ひ先へい行かずして此所へ立歸りきと語りしよ亭主是を聞て扨々それはあぶない事かな其變化はひゝとヤて猿の二千年を經て通力を得たる獣あり其故は彼森山には至て猿多く居るゆへよ所の者

共是をからんが爲六七人彼山よわけ入て右の獣に出合ひほう〳〵の躰よて逃歸る由所の人よ此事を聞しよ夫いひゝ成るべしとヤたり貴公の逢ひ給ふもかならず其類よいべしとヤされども此獣はくもりし日よと出ざるよまなれば貴所もし氣味あきく思ひ給いゝ四五日此所に逗留あつて曇りし日を待て岡山へ行給へとヤよ付某も其言葉よ隨ひ二三日過て曇りし日よ嘉由を立て當所へ至りしよ森山の途中何のあやうき事もあかりき我は右の獣よ逢し物語りと芭蕉翁の逢ひ給ひし獣其あやうき事相似たりと語りきかば芭蕉是を聞くおもいず手を打て扨〳〵獣よ我〳〵雨人ともよ右の如くの難をれがをたるは佛神に請られたりとヤべきと何れよも悦ばしき次第へとたがひよ断き合ひ芭

蕉盃を取上て

晰しさへ凋手合たり春の雨

と吟会興を催ち其外逗留し内數日種々もの語りして其後

芭蕉は荆中に暇乞して岡山を立て夫より備後伯耆の方へ

回國せられしとなり

芭蕉備前の阿川にて難義

附何とあく仇をする事

投入や梅の相手よふきのとふ

扨芭蕉は岡山の荆中が方を立て備後伯耆の方へと業てゐ

もひ岡山の先に丑のまとゝいふ所あり此所と越れば阿川

といふ川あり此川は上は同國曾根川より流れ下り海へつ

ながり左程は大川よはあらざれ共流あらく深し然るよ

備前の備後への海道なれば旅人を運ぶんが爲よ所の者共

船を出して渡しをなせ此時芭蕉此所の渡も場へ来りて船

に便りてあなたへ渡らん事を思ひいまだ早朝れ事あれば

乗り合ふ旅人もなく舟も岸へ付て舟頭い居ざりければ芭

蕉おもふ樣未早朝あれ ば渡し初 まらず と覺ゆ此岸よ立

居んもいかがなり何れへありとも志ばらく休息をなさん

と彼是と見合せけれ ば酒屋と覺しき家只一軒見世をひら

きあり志かば是幸の事と芭蕉その見世よ立寄り我は此渡

しを越ゆる者あるが未渡しを初まらずと見ゆれ ばしばら

く此見勢よて休息し渡しを見合たしばし貨し給へとい

ふて則見世ゐかなはらよ腰うちかけく渡し場のかたを見

やりてゞ居たりける然る所に渡しの舟願共を見へく十四

五人此酒屋へどや〳〵と押入て酒を所望して出させわれ呑に何れも數をかたむけ太勢の事あれは酒代多分なり彼者共は代物を拂ふ時よいたり三百錢程不足あり酒屋の亭主此不足をかてんせずして了ける其訳方よい前々より多分酒代を借られて甚迷惑なり其上早朝より來りて又い三百文かりんとの事存も寄ざる事且又早朝より斯て又代物の不足ありてい其日中不吉なり是非〳〵三百文を出されい得といふさなきにおいては其元方より數度の酒代不足を了立此後渡世場よりて旅人のいたす舟ちんを此方へ引取了あり とて甚立腹しけるの舟頭とも大きよあまり三百文出したきにい壹錢もあ者又出さねは舟乗りの頭へ屆のあらん事を恐れてすべきやうなく見つけるが其中に壹人芭蕉が只

壹人もく念ともくゐるをちうと見やりて爰の者共へ何やらんさゝやきけるがほどもあらず芭蕉がかたへらへつかつゝと來りさて横平に立はだかり芭蕉に向ひて了けるい我やは當所渡しの舟頭なり今れもいずも酒を過し代錢三百文不足なり右よ付近頃浮無必よいへともゆ持參わらば三百文我々へか者紳れとさ者付て了ければ芭蕉是を聞ていつれも知る人よてもあき所よ借しくれよとは貰はんとの事あるべ者何のよし身もあきもの共へ三百文くれん事詮もあき至りと思ひ殊更諸國修行の事あきい路錢も多く遣ひ來り者故則答へて了やう我らい諸國修行の身尤貧家の者あれば路錢抔も不自由なり據なき御無必なれ共なり合されい是非よ不及浮斷了いと云彼者ども是を聞て無法

にも大にいかり諸國修行も致さるゝ者が貯へのなくまして成るべきか特よ人体か形かわつていやしき人とも見へず悪ちゞ三百文手あきとゆうさるゝ事偽りなるべし我々も男なり斯申出しぜひ乞請て置べきや借ずんばか様よして貸らひゆへ之と大の男が尻ひつからげ黒のとくなる脱を著のべ芭蕉が懐けへ手を入てさがし出さんとする芭蕉い大よ驚きあい狼籍なりとふり放さんとする所を襲りの大勢同玄く腕まくりして芭蕉へ取てかゝらんとする氣色あり酒屋乃亭主族人の難義を見かねて急き中へわけ入彼者をおさとゝめゆけるは其方と異のさめたる振舞かな唯人か又見ずしらずの者よ大切の金錢をくまる物わらん無理至極なりとゝめけれ共彼者共い曽て聞入ず亭主も今と持

あつかひ浮れ共又々かれらよ勇ひ奮元方わゞか三百文に て斯お氣翔よ長ぶ事族人の前氣の毒雷功あり不肖なるら我ら了簡もて右め五百文明日迄相待べ之是よ使てしゞまりめされよとゝいゝければ大勢の者共太に慌び然る上い明日迄待くれちれいへと約束して曽々彼しの方へ出行けり亭主驚よて芭蕉よ向ひ切々不埒なる者よせい之かも貴公のかしあたへら者ざる一を此上心よかけ滑を嘗よていか様成ひが事を致しゆさんも斗難し隨分心をねら之給へとゆける芭蕉も尤なる事とて一議をのべ彼之も初りければ芭蕉も同じく渡し場へ至り舟よ乗りける然るよ其船頭共先よ芭蕉よ錢を借かけたる男之芭蕉是いと悪ひけれども早舟も三三間川中へ出ければ何知らぬふりよて乗り居た

りきに樂の如く彼船頭跡より出し舟の舷頭をまねき其舟へ大勢れ乘り合を移し芭蕉ひとりを自分の舟ゑ殘し川中になりし時船頭芭蕉がゐり元をとらへ汝先刻よくも我らよいちをあたへきよな其お禮斯の如くとてすでゑまた懷中の品々を取らんとそる芭蕉大ゑ仰天して命も終るかと思ひしかさすが發句狂歌ゑ名を得たる頓智才藝の弱なれバ大ゑ笑ひてナけるは我は諸國を修行の貧者何澄飯乃たくわへもいいずされとも我へ無心ナかけられしかとも貧ゑしてあたへざる事は情なきゑ似たり依て今其元へ與るべき金もふけを敬きへ進ぜん其手段と今日童頃ゑと岡山家の侍と偽京都四條の芝居の役者共僧前の方へ雨人越さんとて此渡し場へ來るべし此役者雨人ゑて金五百兩懷中

せり我等は岡山の城下まり此時迄同道して來りけれいゑく知りはべる所ゑ足下何卒此者を伴受て只雨人斗舟へ乘せケ樣に川中にいかい數ナ事なれバ雨人とも打殺しかの金子うバひ取死がいい此川へ打ゐみ給へは誰知る物あく手をぬらさず幸福の身とゐり給わん斯告ゑ我等も金子の二三拾兩は貰べくとづあれとも先ゑ三百文用立ざる代りに此禮をも受ナま玄もいや遲付此渡し場へ來るべし何分仕とげ給へかし其役者は兩人侍ゑ出立しかつかう衣類の色迄誠しやかに告けれい邪欲增長の舟頭此事を誠と思ひ大によろゐび芭蕉かゐり元を放ゑ返つて一禮ゑてナやう其元樣ゑはよ々とそ告給へり我も人間と生をか樣の船頭をわざとする事心外ゑ思ひ何卒樂の身の上とならん事を

おもひけれども金子あなければ是非もなく何分いか様の事をあるとても金子を得んと思ふ所より是そ一段の事也若首尾能仕とげなば勝より足下を尋ね行此一連れ引まくはあるべし早くもと人渡場へ立戻り相待べしと芭蕉をいそぎ向ふの岸より付自分はあわてたる体にて急ぎ其舟をこぎ戻る元の渡場へ立戻り芭蕉からき難をのがれ岸へあがりけるやいなや早々其所を立さりける扨かの舟頭い元の渡場へ立戻り外の舟頭幾度か旅人を渡す中に自分は右の丁管あれば目て舟を出さずして彼待い来るやと傾ひ居たる所より芭蕉がいゝしより遠はず高瀬の色わのとを我が待待雨人川岸より来りけんついま舟を呼ければ最手より帆と彼船頭おのが船を漕寄せて後雨人を乗せてかゝ

欠

MISSING

掉をさして船を出す程もなく船は川中に至りしかば船頭いしをましたりと掉を打捨て彼侍兩人の前へつかつと寄て兩手ゑて侍れ胸ぐらをつかゑ是侍の似せ者め實い京都の役者ゑして兩人金子を五百兩持參仕つらん此方ゑてよく知りたる事なれば直ゑ渡すべしとすでに懐中ゑ手を入んとする時右の侍大ゑいかり汝い不屆千万なる者あり我々は誰とか思ふらん岡山の家中ゑて名を知られたる相澤又七米澤民部と云ものあり然るに役者あどゝ云あすゑみあらず金子五百兩持參したるゆへに奇ひとらんとの事ども其分ゑして置がたし言語同斷れ盗賊め武士の手あみを見よと兩人ゑて船頭が兩手を取り柔術ゑて渠者打倒しねぢふせて上へのしかゝり兩人が刀の下げをゝつあぎ合

せ縄となる彼船頭を高手小手にいましめ刀のむね打はつし〳〵と打伏て其後船のへりよ立上りこの船の舳頭我々に不屈の働きをあそに付斯の如くいましめたり外の船頭寄りて此船を向ふの岸へ付べしと高らかよ呼けるを此言葉を聞て外の船頭ども大よ驚き彼船へ入替りて向ふの岸へ付たり其後兩人乃侍い當處の渡船乗りの頭を呼付渠船頭が手段を委細よ語り何様不屈の次第あれば其分よなりがたしといけるよぞ渡し場の頭も大よ驚きしがされども我が寄子の事あればいろ〳〵とあやまり夫にても叶はぬば近所の町人をも頼みあつかひよかけやう〳〵の事よて船頭其外渡し場の頭共連印の詫り證文よて渠船頭を貰ひ受たりしが右の脇よ無法者故所を追放よぞ成りたり右

の侍い芭蕉が岡山より渡志の手前迄同道して來り志故兼て岡山の家士成と知りしかわざと役者なりと彼舟頭よ告て其上五百兩の金子を所持なせしとあと方もなき空事をいゝ聞せ欺きしは侍へケ様の無法をさせん爲返つて難義を受させて自分のゆすりをいたされし仇を報ふべき頓智のきてんゝ扨又芭蕉は備後のみ吹へ至りてとある野邊を通りしよ頃は春の半よて其日はいとゝ空も長閑よて暖氣眠りをもよふし道の片わらよ臥きのとうのにぎ〳〵しく出たるを見て其上阿川よて船頭の我にひどくあたりしをだまさすかして來る事を思ひ強力成舟頭おれども欲の甚志き相手よたらずと

投入や梅の相手よふきれとう

と一句を吟ぜ是自分を梅よたとへ舟頭をふきのとうよたとへたるなり此もの譚彼舟頭の事も芭蕉後よ聞及び回國終りて後よ門人へ是を断せり

許六一句よて道を定

附青野ケ原狐の話しの事

あの許六も其頃の俳人なり生國は近江の者久しく駿州よ住居せり許六一年故有て奥州仙臺へ至るとて同所青野ケ原へ來りしか此青野ケ原といふハ五里四方の原よて東北ハ會津の富士よ續て大山あり西ハ郡山の川上南は海道あり許六は此南の道を通りけるか日を夕陽よかたむきし頃俄に道よ迷みまよひあなたとあたと原中を二三町も彼是と歩行けるよ不思議や今迄日も明らかに見へ者が俄に眞くらに成て行べき道も知れす甚難義しなるか許六思ふやう此所ハ山ぎわよして山續あれハ狐狸の類我をたぶらかさんが爲未日の暮る時よ至ざるよ眞くらと成りし事と此ゆへなるべきかゝる時節よはうろたへざるあそかんやうあれと或木の根へ腰を懸くらく成りしを心とせす此躰をおもしろく思ひ發句に仕立んとさま〳〵工夫し

さたげる道もよくまし畔の稻

と一句を詠し扨目をひらき見るに四方わかるくしてかはる事あかりしかハ許六大よ悦ひ早々道を尋ねて本道へ出たり是許六が其怪數よかゝわらす心をしづめて句を吟ぜて正氣を失はざるか故よ變化も邪をなす事あたはそ以前の如き明らかよ成りし者なり扨許六か其後近邊の里へ至

り此青野ケ原よは毎々より怪數狐すみて往來の人をたぶらかして幾度といふ事をしらす只狐の類よわらす所よて彼狐をいきんとん玉とわかめ呼んて難よわはざる爲毎月三度づゝ彼原へ赤飯を煮て持行然る時は少し怪數もうすく旅人いよくも心を落付たまひよひをとゝめ一句を吟し給ふ事世の常ゝ人のおよぶ處よてはなしと一村の者共集り許六を大よほめて暫く其村よ逗留いたゝ其心の落付たるを賞美せゝとかや

支考門人杜友が方へ至る

附恐數夢を見る事

春雨や枕くづるゝ諧本

前書よも出すとく支考ハ近江乃生れ住居ハ京都洛中よ住

居洛中よてそ誹道時行ゝ故此支考の門人とあつて此道をまおぶもの數多ありける此内よ五條坂筋通り和泉屋傳右衛門といふもの有至て有福ある物成しが家人も數多召仕ふ故に亭主傳右衛門ハ手代よのみ諸事の事任せ自分は誹道又は亂舞などを好みて日夜乃慰とせり或時傳右衛門春雨のとせん囃子を興行せんと朋友どもを集めて師匠支考も諧ひを好んて諧ひけれハ是を各々へ酒飯よ集め扨囃子をぞ始めゝる支考は地諧ひ亭主小皷を打夜半頃迄興行あせゝがすてよ番組の通り終りしかハ又いろ酒肴を出ゝ諸人をもてなし他の朋友どもは其後暇乞あして歸りしゝの支考一人といたく酒に醉倒に有ける諧本近寄て僧の事あれハすくに夫を枕となゝくたかいびきよてふゝ居たり主玄傳

右衛門も起ずにしのびん片わらよありし着類を上へ手づから懸自分も寢間へ入りて休みける支考は只一人傳右衛門か座敷へ休そ〻る所にさよ嵐く春風身よしみて支考打驚目覺見るよあいかよ傳右衛門か座敷にあらずまて廣々たる野の原あり支考心得ぬ事よおもひ四方を見るに只一人其原よとまるといふ事を志らす又何國の原中ともさだめず原中よい大木の類ひもあらず只夕顔すゝき乃類のをおひ茂り頃と夜分ゑして月だにも出ざる闇夜なり支考いかゝしてかへるべき道も知らずまづたどり〳〵先の方へ行見るよ一町も先に火の光りかすかに見へたり支考い思ふ樣今は夜分にして東西も知れず彼の火の見へるい定て人家あらん彼所へ行て今宵いかしこよ一宿あし翌日よ至

り早そくよ道をたづね京都へ歸りけんいんとさて右の家のほとりへ行見るよ廣々たる原辻堂のごとく其家にく一軒有唯取立る者もあらざる家と見へて家根は八重葺茂りて壁のきわ崩れいとゝ淋しき躰之支考いされ共翌日を待んが爲右乃家の門よ立て案内を乞ふに内ゟ年頃六拾四五の姥いとやさしき姿にて立出る支考一夜の宿をかり度事をいふよ姥答て〻樣お安き事よいけへども此所は野邊よして人家を放れて萬づ物も不自由よあれありされども苦志からず思召けへば一夜を明し給へといふ支考是を聞て野邊よてもの不自由あるとゝさもあるべき事なり一夜さへ明させ給へけはゝ外よのぞを無とて則上へあがり時よ姥〻けるい旅人折角浄宿りなれば何〻浄驅走〻たけれども

右ヤ通りの仕合故有おふ物何よてもなし是にても上ヤさんと差出すを見るよ人間の首なり支考大きよ驚夫人間と生れ甘鹿有ともかくを五穀をあそ給へり如何してかやうれものを食せらるべきやとヤける薬がいく此所い不自由よして五穀といへるとは甘てなき族人もしあれをきらはれしはや明日里へ至らるゝ迄は食させヤ事あるまゑとて則右の首を片わらへ仕思ふ支考いと不氣味成事よ思ひしがさあらぬ躰にくもはや夜深にも成りたれば休ん事をいふ婆別ろ一間へ入れて一ッの石の枕を持來り是をして夜を明き給へ浮覺の通りあれバ夜具とてもなしとヤ置て次の間へ出る支考枕よかゝらんといせきが彼石の枕よて思ひ付古へ武州安達ケ原よ一ッやあり其原廣々とまてまこ

とよ留りしらず右の一ッやゝ其原の半頃よあつてあるじい鬼女といへる行暮し族人あつて此所よ一宿なす時は伏る後よ及んで石の枕をあたへ上ゟ大き成石をつるして旅人寢たる頃右石の繩の切て落し族人を殺ゑて是を日夜の食となし其衣類をわが身よまとふめ斯多くの人を殺す事九十九月よ及ふ然る處に有時尊き聖人此宿よ止り合てそでよ休るゝ節よ及び石の枕をあとふ名僧成ゑかゞ自分を殺すべき鬼女成事を知り給ひ一切經の惡滅經第十零目のいと有難を讀誦有て夜もすがら寢給はず鬼女は佛經の有がたきになずみ惡心邪横の心もうせてたいつつかりとして件の經文を聞居たりまよ智しきは其時彼婆よ向へれさまゝ歌謂ありしかゞ鬼女い忽よ惡心を滅ゑ善心よひ

るがへしてぞ空よりうせて佛果を得其後右の原へ來たらすと云りかゝるためしあれば此石乃枕も扨い此宿の婆も右鬼女の類ならんと天井を見るよ大成石をつるしおけり支考さてはと恐をなして側なる所なさしのすきて次の間を見るよ不思義やさいかりよ賤しき婆其さまみのたけ一丈余りの鬼女と變玄白髪の左右にこぶのとき角生ひ出面脉よ髪をかぶりて眼と日月の如くあたりをかゝやかす焦れ如く毛生し腕をさしのべて何やらん引出せしもれを見るに生々數人間の死骸あり しかゞ頓てそばへ行引出し腕をぬき足をおつて鰐口の如き口をひらきてむしゃ〳〵舌打なして喰ふ有さよ恐敷あといふばかりあし支考思ふやう我あやまつてかゝる怪敷よ一宿せり此儘よてあらば五

十年の命彼れが爲よ害せられん事よと身かい〳〵敷支度なし裏口れおはれ走壁かぬけ出て何國ともなく落行けるよ彼鬼女是を知りけんわめさけんて追懸る事甚急あり支考は猶も足早に逃去りけるか鬼女又走とふ事遠よして終に支考に追付けるがさて支考よ向ひもせを支考かすそ元へ來りて消失けると聲耳元へ鬼女か叫と思ふ聲殘りて忽ち一村の夢とそ成ける支考は惚身よあせをひたし起わがりて見るに傳右衛門か座敷に一すいなしての夢ゝけれい支考奇異乃思をなてさて〳〵ひやいある夢を見たりされ共此夢に限りて不思義さよと思ひなから枕とせし諺本の上書を見るに安達ケ原の諺本ゝ支考奇異の思ひをなし誠よ安達ケ原の鬼女と浮世よかゝる諺の類ひ迄もなし

諸人の怨しき事としてしる故に其殘執の殘る所や我れ又此本を枕として思はすもかゝる夢を見る事の不思議さよと思ひけるか其夜もいまだ五更の頃春雨はなをふりしけるか支考此春雨を題となして

春雨や枕くづるゝ諸本

と口ずさみて程なく夜明ければ支考亭主傳右衛門へ昨夜の夢物語をなして傳右衛門も此由をきいてげにも不思議千萬と奇異の思ひをあまよける

芭蕉筑前小佐川越る

附多吉夫婦れ靈魂の話しの事

川上と此川下や月の友

芭蕉備後伯耆の方か長門因幡を越へ中國を廻國し夫より長門の赤間ヶ關より船よて豐前の小倉へ着夫より肥前佐賀の城下へ至りて宿評といへる儒者の元へ數日逗留なして肥後へ國を經て筑前へ至り同國元崎と云村へて畫休みなける頃い秋の初つかたまた暑氣甚しかりしかしばらく其村へて畫のあつさをしのぎ扨日も西へかたむきけれゝ今はあつさも薄らぎしと思ひ亭主へ暇乞して秋月の城下へ至らんと爲す亭主是を聞てとゝめてやけるい旅人今より秋月へ至り給いんあらは決して伊無用へいん其故は當所より秋月の城下迄七八里なりけふい既へ未の刻を過たれは半道はかならず夜へいらん時へ秋月より一里あなたへ小佐川といふ川有其川に土橋かゝりて通行をなすなり

然る所去年中より夜よ入りれば其川上よりつかれ果たる男出て土橋の上よたゝづみ川下の方を遙よ見く名殘をしげよかなしと呼事毎夜こ是を聞物おじ恐れずと云事あし右よ付夜分よなれば唯一人り通る者あらず旅人おきて秋月よ至りたまはゝかあらず其變化に逢給はんとヲければ芭蕉是を聞て問ひけるゝ其變化は人間よたゝりをなすやいなやと尋ねしかば亭主答へて只出てかあしみさのみ曾て人よかまゝずといへば芭蕉又ヲけるは今乃もの語りを聞くつら〳〵かんがへ見るよ化生れ者なるべし我古人よは及ばねども我も定家の道をしたひ誹道發句の道に通したれば万一變化の爲よ怪敷事もあらば秀句をもつて是をさとさん是鬼神をもやはらぐる歌の道こいいんやあれ

らん變化の類なり何條さる事乃有べき我諸國を廻るも誹道の一語を世上よ知せんが爲こ今夜某彼小佐川へ至りて變へし誹道をもつて件の變化をさとをべしとヲければ亭主是を聞て旅人ヲ言葉の如くにて變化二度出ずんば所の幸ひ通行のよろこびたらんとヲにぞ芭蕉則右れ亭主を案内よつれて小佐川へ急ぎけるよ亭主はゐる松原にて芭蕉にヲけるは是より此野邊をゐ出あれば小佐川へ出ヲゝ日も暮方よいへば變化の出るよ間もあるまじ私は是よりゐ暇乞をヲ立歸りゝあり旅人若變化を見屆わらば又ゝ此方へゐ立歸りあれかし待入ゝあり夫ともよく〳〵ゐ必付ゝへとヲ置て亭主は我家へ歸りける芭蕉ゝ亭主のおしへよ任せ右の野道を半道斗行見れば差渡三十間斗の川有りて

正面より土橋を懸渡せり芭蕉是を思ひ變化はいつれより山るやよく〳〵見届んと彼土橋の中頃より立留て川の躰を見るより向ふば枯木れひ茂りてあたは今來りし道にて川岸より芦まゐもの類生しげり水の流れはまづかゐれども深き事底をまらず人家へ遠ければいとゞ者しづかよして空は秋の夕間暮實にあれのけしきなり右の枯芦の中より破損せし捨船ありしを見て芭蕉

枯芦の中より淋しや捨小船

と吟じつゝ變化の出るを待居たりしに程なく暮六時頃に及び頃は七月四日此事なりまゐるべ宵に少し月も出たれども早亥の刻よりもありしかぱほのくらく遥に川上の芦なを生茂りまゐ水中より青色の玉光りをはなつて二丈斗上へ

立のぼり又舞下りたりしが其玉程あく土橋の上へ來り芭蕉が三間斗向へ落けるが一村のけぶりとあり消へ失たり其光りの消へたるとひとしく右の處よまぼろしの如く一人男あらはれたり芭蕉是を見てさくあそと化生者を能々もかゝ見るに其男身よ白き物を着し髪をみだゝ面色青ざめ五體は疲おろ〳〵しく見る影もあき姿よて川下の方を遙に見やりいと細き手を出して川下をまねきて糸の如きの聲を上げておてふ〳〵といふて何とて爰へは來らぬぞ早く此所よ來るべゝと呼ければ又川下にも聲あつて我いゝ其處よ行たき事山々あれども前世ゝ罪科執念の空となり中をさへぎり其所よ行事能いずあらなつかしさよとなげきゝ聲遙に聞へければ是を聞て彼男いとあわれある聲を

上てあきかおしむ事頻りゝ其聲いやら數二度聞べきよあらず芭蕉はけしからず思ひしがかねて心得たる事あれば彼あやしき男に向ひてヤけるはさら〳〵心得ぬものかあなん玄は異形の姿にて夜中といゝ此土橋の上よ來り頻りよ泣かゝゝむ事あんずるよ此世よあげきをせゝるものゝ執念と見へたりいか成者ゾと言葉を懸れば彼男是を聞て芭蕉をしけ〳〵見やりけるが泪をはら〳〵と流し答へてヤるゝい夫よ浮座あるゝ此世の人にてまゝ升か能も問ひくれ玉ふもの哉我々も何をか包まうさん浮さつしの如く世の人よあらずめいゝ乃院人也我此所に毎夜顯れてかゝるひたんをなす事其故有我〳〵は是より一里秋月ゝ城下の町人よて多吉と申者よてゝひしが苦悩のいたづらにてあ

たり近きものゝ妻と密通せんを忍ひて樂の思ひと二世懸ての約束を致去年の夏の事ありしが迚も秋月と有りていと樂に夫婦と成る事も叶はねば兩人ア合せて立退とする所と跡より追人かゝりはからずも此所とおひて大勢の者に取あめられ既に縄目の恥を受たりしとかの亭主たる者大と腹立し某い此川上へ右の女を此川下へ連行汝ら殊と不屈の者なりよつて兩人ともと沈めとかける同じ場へしずめんと口をあければ川上川下兩所へいけて沈むると言て兩人ともと身と大成石を背負はせられ川上下へ投あまれ底れもくずとなり果たり其死ざは迚も兩人一所と死あん事を残念とおもふ執念死後と至る迄忘るゝ事あく盤魂愛

いへども行かんとせれば其苦しき事限りあく又行ざれば愛着の念と苦しみ川下とても右の苦しみとやなつかしく行たきと此聲は聞ゆれども一所といたる事あたはず我はあまりのゆかしさと靈魂此橋の上とあらはれ毎夜此下れ女を戀したひあはをゆ人ゆなさけと我を川下へ連行女と逢せ玉いれかしひとへと願いと身をふるはせ戀あがれかあまげとさけぶ聲いとものしくぞ覺へたり芭蕉此山を聞て是相着の念と依て本來空に歸らずまて靈魂苦しみまよふならん教訓まてさとらせんと芭蕉聲をあらゝげ彼化生を叱くやけるは汝何れの体ありて川下へ至て女とあいんとあげくや既と其方は死して魂い天に歸りはくは此水中と有然るとと汝死後と彼女を戀あがれい所に身まからん

事の本意おきよと思ふ心故其念のかたまり一ッの院氣と成て末空へ返らず是執念の深き故よして正敵人間の陽心よわらず鬼院のたぐひなり斯の如くの上は何とて思ひのまゝよ右の女よまみゆる事成るべしきみへずして苦しむは汝らが婆婆よてよおきをなし且非道の死をとげおとくくうかまざるが故こかし人間の性れ空々より來て空くよ歸る其故よ仇もあく恨もあく愛もなく楽もなくもみやかよ念をひるがへし本來空よ歸るべし我數年れ功をつみし誹句の教化よてふたゝび汝が執念を女の執念よ合集なさしめんと芭蕉高らかよ

川上と此川下や月の友

と吟じけれゝ芭蕉が教訓よ靈魂を得道やきたりけん彼男と見へしは一ッの青魂と化し一遍か川下へ至と等く又川下よりも青魂飛び來りて二ッの玉合集して又放をはなれて又合ひまはりめぐる事數度なりきが二ッ玉もつれ逢ふて西乃空へ飛去りけり芭蕉きい乃思ひをなし其後しばらく伺居けれ共更に怪きき事もあければ夫より夜中よ元崎へ立戻り宿の亭主よしかくの由を語り明夜よりは決して變化出閻敷ぞと予ける翌夜其時分彼所へ行見るよ何の怪敷事もあきぞふしぎあり・

或人のいゝく芭蕉いかよ誹道よ賢しと云ども靈句をどにて男女の執念乃さんずる事も有ま玄自分として乃もの語りゝ唯見き者もなければ心得ずといふより變化の出ざる事是何れにしてを芭蕉乃働きありと申

せしといへり

芭蕉怪敷者ゝ逢ふ

附古馬ケ原一里塚斷ちの事

かつゝ烏板べの脊戸の一里塚

芭蕉は夫より筑前秋月の城下へ至りさる方ゝ逗留して其地乃体を見るに當城下ハ誹道一向ゝはやらず扨當所を立さり其後福岡東蓮寺をそぎて又筑後へ入り國中をまハり久留米の城下ゝ至り誹道もつはら流行ければ芭蕉ハ雨丹と云誹人の方へ數日逗留して和歌誹道の事をあらハし當所の者共其道ゝ分明發句誹諧ゝ至迄だぐひなきゝ依て芭蕉をひさしくとゞめて門人とならん事を望といへども芭蕉廻國の念願なれバ留らざる事をしり漸々一ヶ年ほど逗

留して雨丹ゝ情を一禮して則後當城下を立出同國古馬ケ原といへる野邊を通りしゝ此原四方は田畑ゝ成て人家を放れ殊に草ぼう〳〵と茂りて日暮といへども道を通る人もあし芭蕉ハいとゝもの淋しく過行所ゝ芭蕉が跡ゝ歩行來るものあり芭蕉ふり返りて是を見るゝ年の頃ハ九才ヨの女子いとうつくしきが手ゝ何やらん持て來り芭蕉を見ておじさまと呼ぶ芭蕉思ひけるハ此所ハ邊ゝ人家を放れ殊更ものすごき野邊を未幼少の女子迷來る人もなく只一人來り我を呼事其意得す是かゝらず狐狸乃たぐひの我只ひとり此野邊を通る故化さん爲か樣ゝ呼び聲しゝらんしかし樣ゝ心付上は化さるゝ事も有まじ何を答へ見んと則挨拶をしてゆきけるはれゝと呼るゝは我が事か見るゝ幼

少の女子成るが只一人何の爲ゝ此所へは來るヲ汝正眞狐狸の類ならん旦又我等ゝは何用事有て呼びけるヲと問ひければ彼小女答へてヲけるゝ私は左樣の狐狸の類ゝては無沒座おじ樣へ賴たき事有るゝり其故は私が父ゝ此先三谷村とヲ所の者本左衛門とヲ者ゝて尤母も沒座し何卒母樣へ此鞠を沒届可被下いと糸ゝて見事ゝくゝりたる鞠を出して芭蕉ゝ渡しければ芭蕉則是を受取其後ヲけるゝ頼の上と成る程母へ此品を渡せべけれ共あゝに一ッの不審なると汝いと幼少ゝして父母の元ゝあそいるべきに左樣にはあゝして我を賴事さら〳〵應得ずそゝて汝ゝ何方に居るぞと尋ねければ小女答へてヲやう私只今は此京に住けり少し行けへば則我宿なりとヲにヲ芭蕉はさら〳〵合

点ゆかず是疑ふ所もあき狐の類ならんされ共其所をとくと見届ヲべきと小女言葉に付て何かあしゝ扨〳〵其方は淋しき所ゝよくも住みはんべる事ヲと何れゝもせよ一所ゝ至りて汝が住居をも見べきと打連て行道すがら芭蕉小女ゝ問ふゝ汝此所へ來る事は賞ゝれしゝもあるやと聞ゝ娘と聞ていやもらゝれしゝはあらずといへゝ芭蕉いよ〳〵心得ず然らゝば汝か親族の方ゝてもありやと聞ゝ是もあゝと答へけるゝいだ程あく草村茂りゝ所に來りければ此前にて彼娘ヲけるゝは此草の茂ゝ中ゝぞ私か住家なり早〳〵冥途の使しげけれゝれゝさまおさらゝば〳〵何卒右のまりを母さまへ沒渡し下されかしと其言葉未おわらざるゝ其儘姿は消て失ゝけり芭蕉は奇異の思ひをゝし何れにても

此鞠が殘りてあるからい此先乃三谷村を尋て本左衛門と云者あらバとのまりを出して見せんと則此所と去て人里に出三谷村といふ所は何方よやと問ひけれい村の者答へて則此村なりといふ芭蕉又ヤけるは此村よ本左衛門といふ百姓いありやと聞バ右の者ヤい其本左衛門といふは苗跡を戸塚部とヤ當所よても有德なる百姓にて則ちあきに見へる高き家とそ本左衛門が宅なりと答へける故芭蕉其家に至り見るよ家作も大造りよて家内の人數も大勢成樣子内よては百万べんの聲などきたり芭蕉は案内を乞ふ下人出きかば芭蕉ヤけるい浦亭主夫婦の来へ對面し度由をいゝ入れけれバ本左衛門夫婦是を聞く立出見れば見なれぬ旅人用事とは何事ありやと芭蕉を座敷へ招き入て其故

を問ひけれバ芭蕉其時物語りけるは我は諸國修行の者あるが此跡乃野の邊を通りける所に年の頃八九年ヨのうつくしき女子の某を呼んできか〳〵の事をヤさを此鞠を三谷村乃我父本左衛門と尋ぬ行母へあのまりを浦屆下さるべしと頼かれきた故則鞠を受取一所よ連立て來りきよ一村草の茂りし前よて我よ暇乞して姿い消へ失せし事どもをくいしく語りて彼鞠を出き母よあたへけれバ女房は是をくり返き見たりしがわっとヨになき出す本左衛門も能〳〵見て是もともよふしゝづむ數刻のなみだよくれけるが夫婦いやゝあつてヤけるいかゞるかあしき事もい物哉其八九才の女子い我娘の亡靈よていべし其故は我〳〵只一人れ娘を持タるが其生れ付ヤもいかゞあれども諸人よ勝れ

今年九才に相成りける至極の才藝ものにてむらなかゝ巻者にいひしがいか成前世の因果よや先月上旬の事なるが此先の野邊へ夫婦が彼娘を連れて慰がてらに参りい所娘もいとれも白げゝ此鞠を持て二三間先よ遊ひ居たる所よ其さま小馬の如き狼何方より飛び來りけん娘を横さまにくはへて遥向の野邊へ逃去りぬ娘は此まりを持ながら泣さけぶ聲のみ遥よ聞へたり我々夫婦は大よ驚きあるよもあられずあゝあたゝあたと尋い得ども何れへくいへ行しにや既よ一時よも及びも無ば今更尋ねればとて狼の爲喰ひちらされ跡ましき躰を見んは必定なり然る上は返つて思ひをます道理なれバ何れよも過去ゝ因果是非もなき事とあきらめ宿元へ歸りしが夫婦ば晝夜なげきよまずみ食事

ものみ込事あらず近所乃衆頼跡をとふより外ハなし今日は娘が命日よ當りい故御覧の如く百万べんの供養をなしいなり然る處へ旅人のゝ物語並よ此まりを我〳〵が方へ遣ゝい事扱は娘が死骸野の邊よ有故よ尋ぬ出しほうむり呉よとゝ父母への願を旅人へ告し者にいへゝ旅人も今宵ハゝ一宿有て娘がために一ぺんの念佛をゝゝ手向下さるべゝ明日はとも〳〵彼野邊へ参りせめて娘が白骨よてをひろひ取念頃よとふらい度いと泪にくれてヤよゞ芭蕉扨い左樣なるかとゝもども數刻の泪よくれ居ける其夜は佛事おこたりなくしまひ翌日よは芭蕉諸とも本左衛門夫婦家内の者ども古馬ケ原へ尋行て芭蕉がおしへよまかせ草の茂りゝ所を大勢の者共かれあれとさがしけれバ骸骨と

く惡獸の爲に喰れしこと見へて足手の骨並一ッの髑骨を得たりにくはなけれバ其女子とは知れねども亡靈のあ乃所は我住所と告ゝ上と疑ひあらずと右の骨を取揃へて菩提所へ送りほうむり法号を車敬智せん童女と号ゝ扨又右の野邊よも一ッの石牌を立たり芭蕉其あはれあるを思ひつゞけ追善よもと彼の石牌よ一句よて追福を述

かつゝ島板べの脊戸の一里塚

かつゝ島といふは十才ゞ内の女子死して其念三ヶ年の内此島と成るとかや且又一里塚といふもかゝる野邊よつく事有物なれバ此石牌も後々は誰參る者もなく一里塚の如くよならんとの心を讀る句なりけり實よあはれある事ども

も有り其後年紀へて芭蕉が言葉の如く今は石牌も古び誰參る者もあけれ共云い傳へ九州筑後古馬ゲ原芭蕉が一句を堀付し一里塚の其いはれ由緒とそいひ傳ふ

芭蕉梅若の塚へ詣る

附怪敷童よ逢ふ事

扨芭蕉翁い四國をも經て後京都よ至りて再仲屋杜國が方へ來り爾來の疎遠をのべく又いろれが方へ數日宿し其後東海道を下り江戸深川八幡町へ立歸り其角嵐雪其外の門人よ久しくての對面を祝しける此後芭蕉慰の爲に只ひとり淺草觀音へ參詣若序あれバとて駒形乃渡しを越へて隅田川梅若の墓へ詣でける頃は正月十一日空は長閑を知らせども未さよ吹風も身よしとく殊更あの頃は求て人の來らざる所あれば川岸よ並び生し小柳此春風に枝をすり逢

ふ音より外は人聲もなき所よていとゃしん〳〵としけり芭蕉は此隅田の川通りを歩行木母寺の方へ急ぐ所を心得ざるは右の生へ並ひし柳の下に年の頃十四才位乃童小聲よて念佛を唱へ金龍山の川越よおがみ居たり芭蕉は不思議よ思ひ志バ志片ゝらよ見て居しが彼童又身をかゝして ふり返ず木母寺の方をふ一拜み居たり芭蕉思ふよう今此所いいと志ん〳〵としてるべき所よもあらず殊更念佛を唱ふる事童よは似合ざる心ざしあり其故を問ふて疑をいらさんと思ひ童が側に立寄り問ふてゆけるゝ見れバ幼少ある童の身よて不相應に も唱ふる事の不思議さよ其故を聞たしいかなればかくゝ念佛を唱ふるゆと尋ければかの童答てゆけるはそれ日本

は神國なれども殊よ佛法盛ありこの故よかくの如き童迄も其佛法の功力を得る者あり是と云も一ッは功力隨變なる金龍山觀音の近ま志すむが故なり扨又二ッゝ當木母寺よ於て大念佛の供養有るがゆへ難有方便よて某今ゝ西方淨土よ至りゝありかるが故よ數百年を經るといへども其有がたき事をとするゝ事なくゝて折ふしかく姿をゝらゝし淺草觀音並當木母寺の方を伏おがみゆゆありといゝ終よ其まゝ姿は消失せたり芭蕉は奇異の思ひをなし世界よ有人間よあらず疑もなき化粧の類なるべし此童が言葉はし〳〵數百年佛説方便を受る事も佛國の御かげなり此故よ淺草の觀音并當木母寺を折ふし拜して有がたき事をのぶるとゆせし言葉を以て考ふるよ年頃といゝ此童ゝ全

以前此川岸に於て獵り人の爲に打たゝかれ此世を去りし梅若の亡靈にても有や何れにも奇代の事ありと思ひ廻すに付てをいとゝ哀れを催ふして南無阿彌陀佛と一べんの回向をあして木母寺に至り寺内を見渡せばいとものさびしく外より一人の參詣もなく人里あがらも寂莫たり物すおきけしき目にさへぎり本堂にて大念佛乃聲い耳元に聞へて實に哀れに思ひ先梅若にもふでゝ見るに其昔印に植し柳はあとかたもなく松櫻紅葉の類のみ塚の廻りにおひて見るに古塚とはおもわれずされども印に植し柳跡方もなくなり行いさぞ其髏骨いくされ朽てこの所の土とありぬるやと思ひ出せばいと悲歎のもとひとなりぬべしとかれども其印に植し柳の根元少き殘りしを見て且又此

塚へゝ以前梅若の霊も出しと聞て芭蕉

さしかけよしても柳ゝ亂髪

と吟じて殘る哀れよ又塚をながめそこを去りて木母寺の本堂よ至りあたりを見れば一人の出家片わらよ居たり芭蕉其僧よ語りけるゝ先刻柳の下にて怪敷童よ逢し事をもうしけゝ僧ゝ是を聞てやうそれこそ梅若の亡霊よていゝ其故は雨天か又ゝくもりゝ節右童隅田川の邊より此地内をさまよひ歩行いたま〳〵の人來りて其童を見付何國の者と問ふに其返答いせずして只念佛を唱へ佛法の有がたき事のみをやけるといひ傳へたり其元逢ひ玉ふを全其童にて梅若の亡霊おらんと語りしとかや

其角お菊が物語りを聞

附杜若の一句の断しの事

山本よとがれて咲や杜若

頃は夏の中頃の事おりしが其角ゝるべの者有ゝ故仙臺の方へ趣しが奥州行方郡多澤と云所を通りし時道の片わちよ古池有田畑の用水とも見へず誠に池もあるかひなく中頃よ少々水のたまりありて然るに此池の岸にそよ〳〵たる夏草あり其中よさも見事よ杜若の咲みだれ其色とよ勝れたり其角思ひゝよは池ゝ次第よ埋れでちりあくたの捨所とおりいと淋ゝき風情なれ共此杜若のかくうつくしき咲乱れ淋ゝき池をかざりたりとて彼花を賞美して

と口ずさみゝばし池の片はらにたゝづゝ居たりしよ何方

鳥邊よは八ッ橋もなゝ杜若

より來るともなく年の頃二八斗のさも美しき女身よも白むくとおぼしきもの着しいけのあなたより彼杜若のきわへ來りまがらく居たりまが其你次第よ薄くありて消へ失たり其角は是を見て不思議なる事よ思ひ是誠に化生の者あらん飼れよも子細の有べき事とたゝずみ居ける所よ通所の者と見へて年老たる百姓の鍬を肩よ懸て池の上成る田畑へ來る其角是こそ幸と思ひて其片わらへ至り百姓よ問ふて申けるゝ我等ゝ武州の者成が子細有て仙臺へ參る道すがら此池の岸よゝいと面白く杜若の咲亂れしを詠め居たりしよ彼様〳〵の怪敷者を見たりと右の女乃事を語りさるよても此花は水もある所よて申よくも咲べきよ彼様な古び朽し水もあらざる古池よかく見事よ咲し事あそ

不思議の一ツ彼是思ひ合すゝ何れにも故あるべき農士其故を知らずやと問けれゝ彼者答へて申けるとよくもお尋ねゝひき事よ成程此杜若よ付ていとあわれなる物語りの有事よて今はむかしになりゝ得共數十年以前の事よもゝひけんゝの所より二里東の方に島田と申町の御座ゝ此町乃有德れ者其家名を織田屋何某と申町人よゝひきが一人の娘を持て其名をおきくと名付ゝ此娘二八頃は美しさふ斗あく承りゝ然る處よ父母もいと寵愛よかし付且又みぎの娘の美麗成る事よおいて同所の同し有德なるものゝ方々さま〳〵賞ひ受ん事を申入るゝどいへども父母ゝ猶寵愛のあまり側を放さず不得心のみにて月日を送る然るよ同國會津の家中よ行元何某といふ人の嫡子辰之助とい

ふ人いか成故よや自分と出家を望まれしよ付其人の親族たるもの辰之助を同道まて出羽の羽黒山へ趣き一山の衆僧となさんとの心ざまよて出立ま右の島田町は羽黒山への往來なれば此所通りけりしよ日も夕陽にかたむきし故織田屋へ幸ひ旅籠屋にて有しかば此家へ右の兩人止宿よまたり辰之助へ兼く出家の望みなれば夜中ともよ旅宿よて夜半迄寐る事もあくまて經文を高らかよ讀誦したり其夜もいつも此如く織田屋の表の座敷にて高らかよ佛經を讀誦してあたりける其聲外へもれ聞へければ亭主聞付て今夜乃旅人へ三十四五の人と十六七の少人成り斯高らかよ經を讀誦有る事いと殊勝の事といへは家内の妻娘も是を聞て實よまほら數人の有さまかあ何さま故有人にやと

次の間に至りのぞき見るよ一人は三十四五歳斗の男扨讀誦してあたるは十六七歳の若衆へ其紐ひ柳の姿牡丹れかんばせたぐひなかりしかば娘は是を見るよりも深く辰之助に執心なし人しれず戀の淵にしづみーが兩親の手前を恥かしく思ひて其体をへあらはせざるどもかりそめならぬ縁よや有けん少まも忘るゝ隙もなく我居間に歸りても辰之助が姿まばろしのとく見へていとやるせ無おもひの種となりけり娘へつくづく思ひけるへ戀こがるゝ人も今夜斗のやどりあれば夜も明けあばいづれにか出去るべき旅人なりしかし此事を乳母よなりと語り何卒彼人を留た き事よと思ひて則乳母をまねきてヤけるは恥かまき事なかられぬしへ我らが幼少より片わらよ有りて養育またる

者なれば我が心のやるせなきに依て其方へ告るなり其故い今宵一宿おせき旋人乃内十六七才の侍方は云よあまる粧ひ經文續誦して居玉ふ時次の間よりひそかよ見るよ其美敷事云よ言葉なし我やるせおくおもひこがれけれ共旅人乃事なをば翌朝と立出らるゝ事なるべし然は今宵の内に我が思ふ心を先、の方へ屆たく我いふに增たる心なればおぬしよ是を告るなり其方何卒父母よ隱もて我思ひのたけを先様へ今夜中つげくれよと口よも余る口説事思ひ入てぞ頼ける乳母と是を聞て扨やう實よも若き侍方の左様の事も有るべき事と存れ侍と幼少より是迄侍側を放れずして付居き侍心安のまゝ侍頼被成れ御心ざし何とていなとヤべし心の及ぶ程れ御取持ヤべし其上先の御方も賤き分らざる御人躰あれば其御方の御心を寄らるゝを誰がわ玄きなく存され共愛に一ッの難義なるは私の力よ及ばぬ事れ先方の御了間一ッなりいか樣成る御返事よれ也心元あくぞん玄そろありあにとヤわれらがこん夜ひとめをしのびそなたさまよ成りかはりおんあゝろのたけをまうすべし先様とても岩木ならねば今盛りの御かた御承知あるべし御文を進せらるべし我は侍返事を取參り今夜中よ二世のかためをなさせヤべきと辰之助が佛道を好み羽黑へ入出家あす旅路とは夢よもしらずきてうばいよきよ受合ヤせしかば娘は悅事限りあく然れ何卒よき知らせこそまつなれと硯引よせ思ひのたけを書乃せて乳母に渡きければ乳母是を受取娘が前を退き兩親のめをしのびて旅人の

一間に至り見るよ連なる男は前後も知らず臥居たるよ辰之助いまだ寐もやらずしく居たりしかば乳母は幸と思ひ辰之助の片わらへ來りそれなる御方よ後頼ア度事よいといへは辰之助ふり返り不思議そうよ見やりてアやう其元にはこの家の人あるかいか成後用ぞと云けるば乳母答へてアけるは私は此家娘の乳母よてい此娘子ハ事よて御願申は外の儀よても御座あくい御前様へ娘の方よりわりなき文をわづかり參りい何卒御得心の御返事を願まいらせいなりと袖の内ゟ彼玉づさを取出して辰之助へ渡さければ辰之助大よ驚きこはそもいか成事よていア私と左様成ものにてはいはず尤此道の事は無據義理よ依てと有まえき事共アんぜずいへども某事は既に身を捨て僧法師と成

べき望よて羽黒へ參る道なれば思召の事は殊更つゝしむ所あり此詳にいへば娘子の思召は添なけれども必よ任せずいと文を手よとらず居ければ乳母はかさねて去とては御心強くいアや私參りてか様の事をアいかり初なら如事ありと言葉を盡していふといべども辰之助皆て心得せざれば力なく其座をのいて娘よかくと語りければ お菊い本意なき事よ思ひ返ておもひいやまさりあるよかひあき我身かあと最打臥て涙よくるゝ有様を乳母はいとしくおもひ今い此譯を父母へ告て右の旅人を留んと則織田屋夫婦よ委細を噺ければ夫婦は是を聞て何れよもひとりの娘が事何卒旅人の出家を留ア仕方は彼少人を此方へ貰ひ請んと夫婦は旅人兩人の寐間へ來り娘がとりあき心ざしを父

母不便よ存じ間何卒出家を留まり玉ひ只今より我〳〵が方に御落付あれかしとヤといへども辰之助は佛法功力すべき前世乃約束にや有けん一筋に出家をとぐべき必ざし故夫婦の言葉をも聞入れず程あく夜も明ければ兩人は出立の用意をなし既に織田屋を立出る娘に有よかひなき必よて既よ自害と見へしかバ家内みな〳〵驚とい め父織田屋ヤしけるは既よ少人斯の如あれバ致方あしあきらむべしかゝ我所存あれば夫婦諸共娘を連て辰之助殿の跡をしたひ此先の里にて是非彼の少人にあはんとて夫婦と娘を連て跡より隨ひけれバよう〳〵追付けるまゝ辰之助よ望て娘と盃を取かわして是よて思ひ切べきと娘も納得の体にて此池の邊り迄歸りしがお菊は父母よ告てヤ様我生れ

落るより御兩親の御厚恩海よりも深き事あれバ此大恩を報ぜヤざれば不孝の義と存じへどもおもいゆげ成る事を父母へ迄ぢらしめ其甲斐もわらす何の面目有て生あがらへんおさらバといふよりも早くこの池へ身を沈めて底ぢくずとなりよけり父母は大ようろたへ廻り狂氣の如くよ成て死骸を尋求るといへども何れへ流れ寄りけん再見へざりけり其年の夏より此池の岸よ美しき杜若の自然とはへ出いか成年よも見るよ咲ずといふ事あぢ是ハ彼おきくが忘念なりと所の者ヤ傳へ今とむかしもの語りとなりいへども何分あはれ成事どもよこそと委しく語りけれバ其角もあはれを催し其一語は昔しとなをども杜若ハ尙はく

由本にあかれて咲や杜若

と追善をなし其後彼百姿に別れて仙臺へそ趣ける

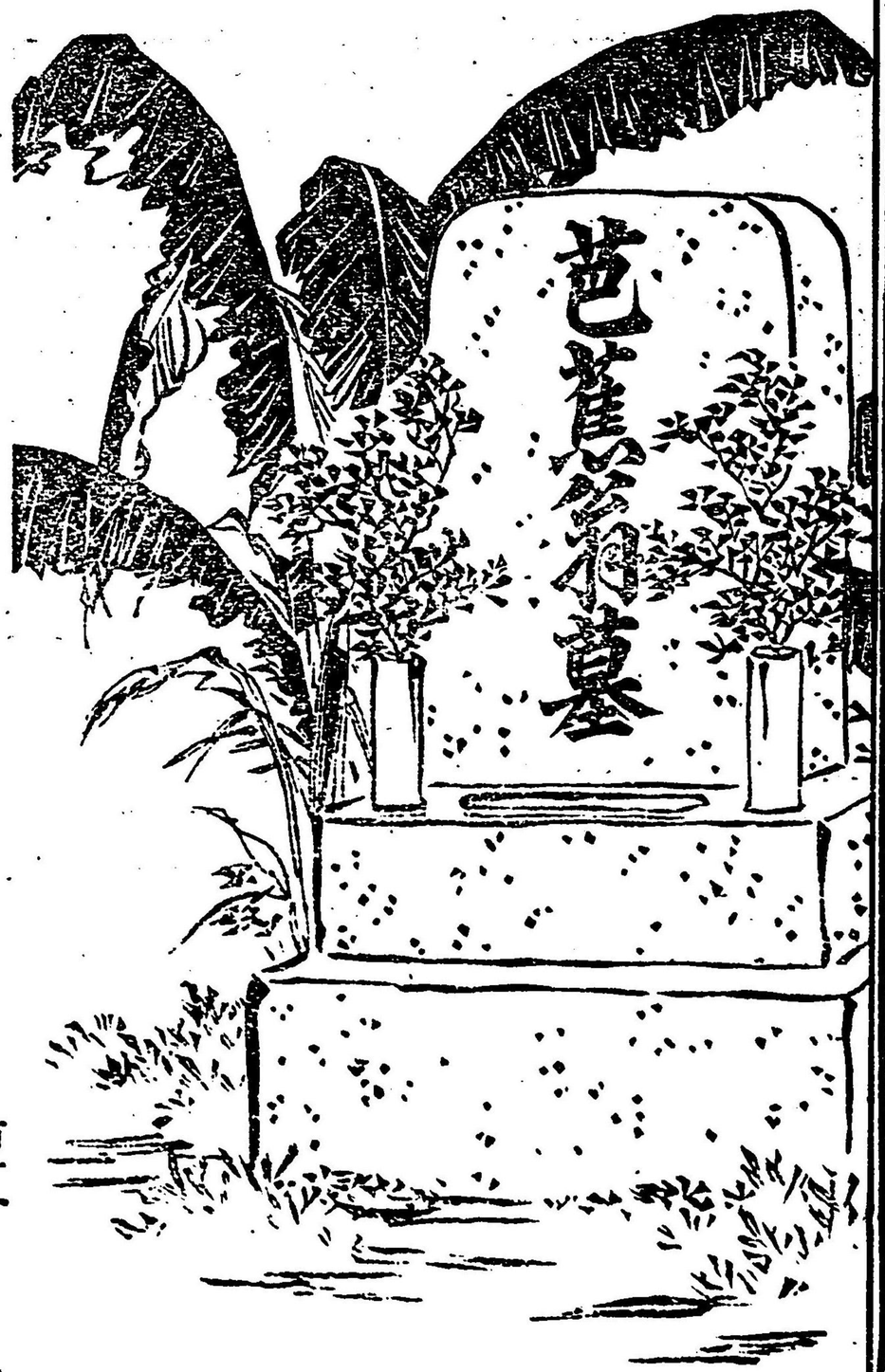
芭蕉翁涙華乃旅窓に客死附門人追善一句の事

つら〳〵おもんみるよ人間の五十年ハ庭前の燈火の如くといへり此子細は庭前の燈火あき所よは一日をも保つべからす若風あらすにおひてと即座よ消へ失し人間とても五臟血精廻りかよふ時ハ百年の命をもたもつべし若あやまちあるか又ハ五臟血精よ痛みある時ハ三日の内にも命終るべし右のへき書金言なるかな爰よ芭蕉翁はさしも人和の道よ達し聰明たりといへ共如何よせん病氣の道よは才發智恵も及がたく風の心地あり志が次第〳〵よ差かも り名醫向ひ門人多く集りて日夜枕に付添ひ看病あせーか

共其かひもあらずして元祿七年甲戌十月十二日の早朝今わのきわに至りて去來嵐雪支考其外の門人をあつめて芭蕉遺言なしてヤけるは各いか成縁よや有けん我が門人と成りて死際迄看病よ及ぶ事誠よかり初あらぬ前世の約束あらめ我今よ於てヤ置事なしといへども一ッの願よて何卒我死骸を近江の國粟津の側の義仲寺へ葬りくれと是の遺言なりとヤ置て眠らんとせしが又目をひらき

旅に病夢は枯野をかけ廻る

一句をのこして涙花の花屋が旅窓よ於て行年五十二才よして客死せり遺言の事なれハ其夜にひそかよ商人の荷物よ拵へ去來其角惟然正秀之道支考呑舟丈草乙州嵐雪の十人涙花を川舟よて近江へ急ぎ義仲寺へ至りてしか〳〵の



由を語り則芭蕉が死骸を埋めつゝ佛果菩提を念頃に吊ひける其日葬式も終りて門人の者其角始め外此者同意して歸路粟津丸大津やどゆふ旅宿よ泊りけるや程なく夕陽よして夕食もをわり各々翁が病氣中より葬式終るまて晝夜をこたりなかけれ共其疲れもいてまや寢まよ入りしが其角ねもやらず翁よ別かれしをいと便りなく思ひうと〳〵寐むり志に枕邊よ翁が姿あり〳〵とあらわれ翁ヤけるは我病中又は遺言の通ねんごろよ義仲寺へ吊ひくれまを事ありがたし我れかへらぬ旅立せーが何分にもあゝろ殘りの一句あるゆへ足下よ告げんと迷ひ出たり

木曾殿とうしろ合の夜寒かな

と吟じ此句を義仲寺よ殘しくれとヤや姿は消失せけり其

角い目を覺しさて見れば影だも見へずあら不思議ある事と思ひ翌日此よおを皆々よはあしせおよ翁の名何に感ぜ日ならず門人追善の事を約束おて歸りけり

追善の發句

義仲寺へ送る　芭蕉翁門人

氷るらん足もぬらさは渡り川　法眼秀吟

行人の徳や十夜の道廣き　其角

泣中に寒菊ひとつ耐へたり　嵐雪

鹿のとし入て悲しき野山哉　支考

忘れ得ぬ寒も十夜の泪かな　京去來

一たびの醫師もの問返り花　彦根許六

鳴うちの狂氣を覺せ濱千鳥　僧李曲

おき跡や風も寒きてちから　大津木節

いふ事をおみたよなるや塚の霜　瀬々昌房

重ね着の花の姿や苔の花　堅田成秀

耳にある聲のいつれや夕時雨　伊賀芳士

我か眞似を鳴くる小春雉子の聲　大坂元道

取つかん便りも悲しかれ柳　嵯峨野明

待受て涙見合す時雨かな　京かや

聞なるゝ聲の屆かぬ枯野哉　伊賀大守藤堂玄虎

耳の庭り氷鷄鳴ゝ冬の雨　尾州鶯川

なきめてを笠よ隱すかさ枯尾花　雷子

芭蕉翁行脚怪談袋終

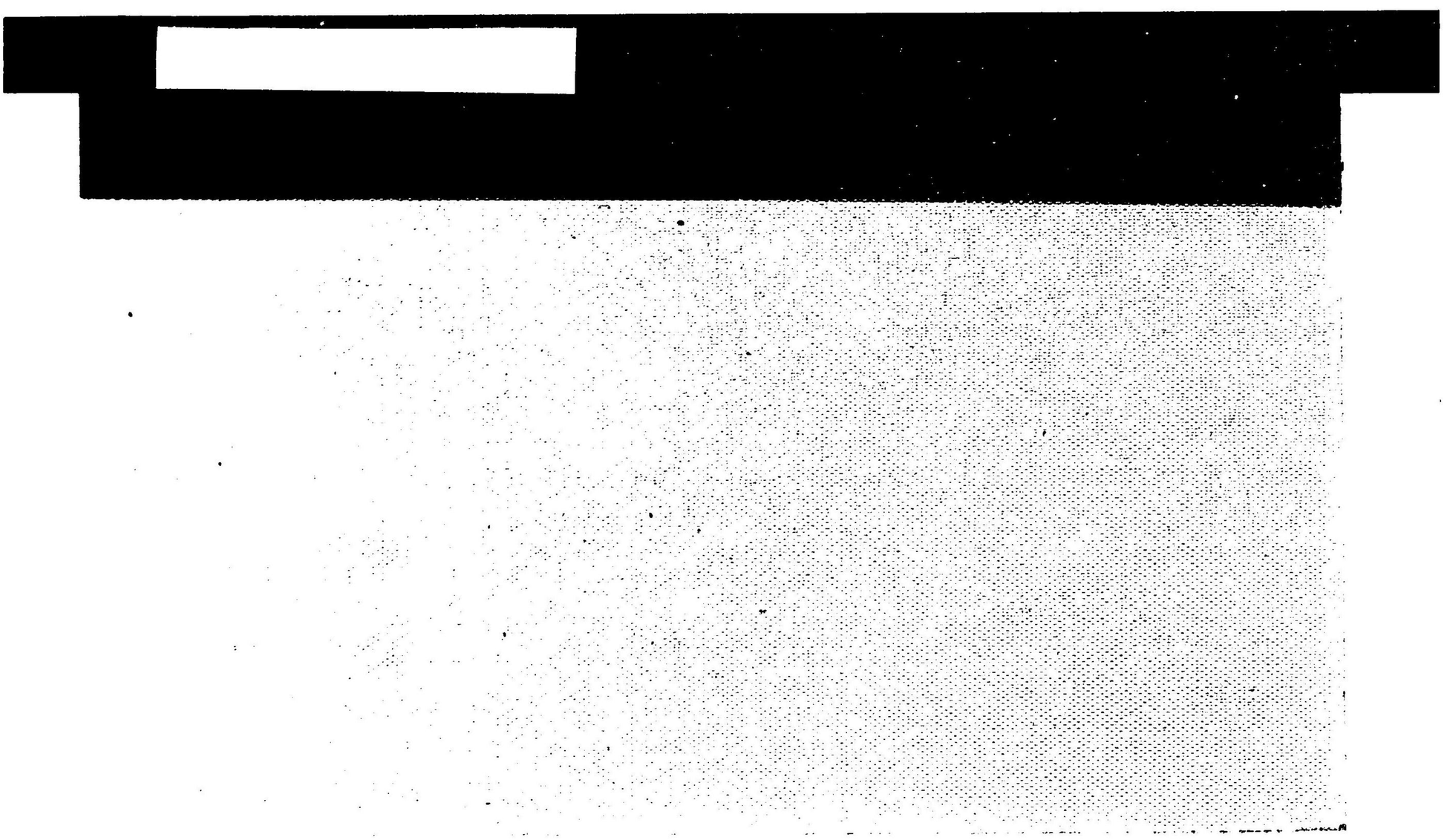
明治十九年六月二十五日出板御屆
同　七月　出板

定價金七十五錢

編輯兼出版人　東京府平民　廣野仲助　淺草區黑船町二番地

發兌人　滋賀縣平民　三好守雄　淺草區新平右衛門町一番地

發兌人　村上眞助　淺草區北富坂町十三番地



特22
468

芭蕉翁行脚怪談袋

国立国会図書館

091248-000-1

特22-468

芭蕉翁行脚怪談袋

三好　守雄
村上　真助／刊

M19
DBN-2102